

独自の物流システムが高評価

「ねじ業界」のパイオニア サンコーインダストリー 人にやさしいIIT化

IITとロジスティクスを駆使し、78万種のねじとファスニング関連商品を扱うサンコーインダストリー（奥山淑英社長、大阪市西区）。同社の独自の物流システムは業界内外を問わず評価が高く、ねじ一本からの注文にも迅速に対応できる。新しい物流拠点の建設も予定されている同社の物流展開などについて、同社物流部兼物流企画担当の森島伸浩部長に話を聞いた。

価格競争より サービス勝負

「人にやさしいIIT」が特長の同社の物流施設には、毎年多数の見学者が訪れている。現会長である奥山泰弘氏の考えは、「機械やコンピュータにできることはそれらに任せ、人はもっと創造的な働きを行う」と。会社を挙げてロジスティクスに取り組んでおり、森島部長は「物流を疎かにすれば会社は成り立たない。商社は製品をつくる役割での勝負ではなく、

ねじの規格は共通なので安さによるサービス競争だけは避けたい。物流で差異化をすることで、顧客に満足していただけると考えている。『物流センターが弊社のナンバーワン商品』を目標に、コア・コンピュータを目標している」と話す。

同社が段ボール単位の自動倉庫を導入したのは1992年。昭和の時代から奥山会長の先見性で、コンピュータや有人のパレット自動倉庫をいち早く採用し、現在は約78万アイテムのねじとファスニング関連商品を扱う。在庫管理のためにコンピュータを導入した企業は当時珍しく、奥山会長のアイデアが実った。現在では効率化が実現し、午後5時までの注文については当日出荷が可能になっている。



同社への注文は、段ボール単位だけではなく、ケース単位やバラも多い。複数の種類をピックアップして詰め合

新しい物流展開について語る森島伸浩部長



わける際に、容量をコグを計算して自動計算してくれるため、詰合せのムダを省くことができる。また、夕方からの時間帯は高校生のアルバイトなども多いが、ハイトレイや一筆書きピッキングなどを駆使することで、すぐ覚えられるという。「一昔前に比べ仕事量は増えているが時間は短縮できています。そのため、リードタイムの短縮と誤出荷率の低減という一見相反する課題にも向き合えている。いかにワン・ストップ・ショッピング

大阪物流センター以外にも第1から第3倉庫、本庄倉庫、長田センターがあり、全国発送に対応している。東大阪市に物流拠点が置かれていたのは、トラックターミナルが近いという理由もある。長田センターの隣に新たな施設建設も計画されており、森島部長は「社員全員で『目指すは100万アイテムの品揃え』だ」と意気込む。

時代を先取る 先見性を持つ

同社への注文は、段ボール単位だけではなく、ケース単位やバラも多い。複数の種類をピックアップして詰め合

き物流の悩みを聞きただし、現場に伝える仕組みがある。これまで一部顧客の要望だった「内容明細シール」をすべての顧客に採用したのも、そうした連携から生まれたアイデアだ。「今はねじの本数が多く届いてもクレームになる時代。物流は経営の要であり、システムが変わるたびに、それを操作する人間も変わる必要がある」と、人材の教育にも余念がない。

ねじ業界は新規参入が少ないため、新しい営業先のニーズにどう対応するか、今後物流のあり方を追求していく（森島部長）。

「まだまだ効率化できない部分はある」と、同社は今後も物流のより良いあり方を見つけていく。

（木村麻理奈）